（別紙２）

論文審査結果の要旨

氏名　　浅野　倫子

本論文は、単語の視覚的認知過程を総合的に理解するために、特に文脈情報の影響に関して実験心理学的な検討を行ったものであり、全４章から構成されている。

第１章では、単語の視覚的認知研究における文脈情報の影響に関する従来の知見を概観する。その中で、文を構成する要素から文脈がどのように発生し、単語の処理にどのように影響するかが未だ明らかではないことを指摘する。本論文では、単語、単語意味、文脈などの複数のレベルの情報が並列かつ相互作用的に処理されることを仮定した相互活性化モデルを理論的枠組みとして、文脈情報の生成機序と単語認知への影響について研究した。特に複数の単語が並列的に処理され、文脈の原型的表象が形成されると仮定し、これをプロト文脈と名付けた。

第２章では、文脈情報の活性化のメカニズムと、単語と文脈の関係について検討する。短文全体を短時間提示し、文脈不適合語または文脈適合語部分についての再認実験を３つ行っている。実験１では、文脈不適合語は適合語に比べて再認されにくいことを明らかにし、誤答時には文脈に適合する語が虚再認される傾向のあることを示した。実験２では、プロト文脈の活性が、情報価の高い単語である内容語の効率的なサンプリングにより支えられている可能性を検討し、機能語の有無に関係なくプロト文脈が活性化することを明らかにした。実験３では、意味が通じない不整序文を用いても、プロト文脈が活性化され、プロト文脈が語順情報に非依存的であることを示した。

第３章の実験４と実験５では、文脈不適合語の検出・定位課題を行った結果、プロト文脈生成時には単語の位置情報処理が進行していないわけではなく、文頭のように文構造上で重要な情報を担うことの多い単語について優先的に位置情報処理が行われていることを明らかにした。

第４章では、研究成果全体をまとめ、文全体を同時提示するという新しい実験パラダイムを用いることにより明らかとなった単語認知の並列処理過程について考察している。この過程は、文が提示されると構成単語が並列処理され、活性化された単語ユニットが単語意味レベルにおいて意味表象を重複して活性化させ、それがより上位の文脈レベルに反映されることによりプロト文脈が活性化されるという動的過程である。このような全体情報と部分情報の並列かつ相互作用的な処理と、それによる意味処理の即時活性化は、言語や情景などの違いを問わず、意味情報を含む複雑な視覚情報処理の初期段階に存在する基本的処理メカニズムである可能性にも言及している。

本論文は、単語の視覚的認知に関して新たな実験パラダイムを考案し、実験を重ねることによって、単語認知の並列処理におけるプロト文脈の活性化過程を見事に明らかにしており、実験心理学研究に多大な貢献をした。以上の点から、本審査委員会は、本論文が博士（心理学）の学位を授与するのにふさわしいものであるとの結論に達した。